

強調を表す複合動詞後項の成立要因について

—「～こむ」と「～きる」を対象として—

王 秀 英

キーワード:「～こむ」、「～きる」、強調、主体、意味派生

要旨

日本語複合動詞には、「信じきる」、「考えこむ」、「恥じ入る」、「叱りつける」などのように、後項動詞「～きる」、「～こむ」、「～いる」、「～つける」が、前項動詞の表す動作・変化を強調するものが多い。本論文は、後項が前項を強調する複合動詞「～こむ」と「～きる」を取り上げて、それぞれの前項動詞の特徴と例文における特徴を分析し、その意味派生を明らかにすることを目的とする。

1. はじめに

複合動詞「～こむ」と「～きる」の意味・用法については、従来様々な視点で分析されている。複合動詞後項に着目すると、いずれも前項動詞の動作や変化を副詞的に修飾する用法が見られる(ex. 実を摘んでいるうちに疲れて眠りこんでしまった。経済産業新聞は腐りきっています)。先行研究では、これを「強調」などとして扱っている。しかし、それぞれどの側面を強調するのかについては、まだ明らかにされていない。また、これらの複合動詞後項に関する今までの研究は、分類に留まっており、その意味派生については詳しく論述されていないと考えられる。

本動詞「こむ」について、『日本国語大辞典』(第2版)では、「こむ」(込む、籠む)の語義として、㊦「ある場所いっぱいに入や物が入り合う、また、用事などが一度に重なりあう」と㊧「複雑に入り組む、精巧に作られる」の2つの意味があることが示されている。本動詞「きる」について、同辞典では、「きる」(切る、伐る、斬る、截る、剪る)の語義として、「つながっているもの、続いているものなどを断つ。また、付いているものを離す」の意味があることを示している。

本稿の言う「強調」とは、複合動詞の後項動詞が前項の表す行為や動作の強さを表し、後項を付けることによって対象に与える影響がより強い、或いは、動作がより強

く行われる(状態変化が強くなる)ように感じることを指す。例えば、「信じきる」、「分かりきる」、「信じこむ」、「考えこむ」、「踏みつける」、「叱りつける」、「締めあげる」、「縛りあげる」、「震えあがる」などの下線部である。本稿は、これらを「強調を表す複合動詞後項」と呼ぶ。本稿は、「～こむ」と「～きる」という2つの複合動詞を対象として、それぞれの具体的な前項動詞及び例文における特徴を分析し、また、強調を表す複合動詞後項が、それぞれの複合動詞の中でどのように成立したのかについて明らかにすることを目的とする。

2. 関連する先行研究

今までの先行研究では、本稿の言う「強調を表す複合動詞後項」をそれぞれ「確認・強調」(斎藤1992:327)、「極度」(姫野1999:77)、「程度進行」(姫野1999:60)、「強調」(姫野1999:42)などとして扱っている。

武部(1953)は、「後項動詞」を「複合動詞における補助動詞的要素」として扱われ、「～こむ」の意味を「強調」に、「～きる」の意味を「強調」と「完遂」に分けている。しかし、「強調」を表す「～こむ」と「～きる」について詳しく論述してはいない。

森田(1989)は、複合動詞「～こむ」について、本稿の言う「強調」の用法を、「終了意識が、それ以上は進まないという限界意識、完全に行き着く限度まで達したという強調意識となり、「非常に」、「完全に」の意を添えることにもなる」ということを指摘しているが、詳しく分析していない。

田辺(1996)は複合動詞のV2の意味の抽象化を文法化という視点から考察している。複合動詞の構成する動詞の辞書的意味が、複合動詞形成後もどの程度生きているかによって、大きく以下のように3種類に分けている。

(1)a. 2つの動詞のそれぞれの辞書的な意味が生かされているもの—意義融合型 ex.

拾い上げる、飛び出す、叩き壊す

b. 前項動詞が、接頭辞化しているもの ex. 取り決める、突っ込む、こみ上げる

c. 後項動詞が接辞化しているもの—文法化型 ex. 読み切る、作り上げる

また、田辺は後項動詞の文法化の段階についても詳しく論じている。例えば、「～こむ」における文法化の段階を以下のように3つに分けて論じている。

(2) 第一段階: ボールを投げ込む。(動作性の前項動詞+(中へ)入る/入れるという意味)

第二段階: このバットは、よく打ち込んでいる。(動作性の前項動詞+程度や密度

が高いという意味の補助動詞化)

第三段階:じっと考え込んでいた。(非動作動詞+状況の程度の強さを表す補助動詞化)

姫野(1999)は、多義の後項動詞の意味・用法に着目して、複合動詞「～こむ」の用法を「内部移動」と「程度進行」の2種類に大別している。本稿の言う複合動詞後項「～こむ」の「強調」の用法を「程度進行」と呼び、それに対して、「動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達することを表している」と述べている。さらに前項動詞の意味特徴によって「固着化」、「濃密化」、「累積化」の3つに下位分類している。複合動詞「～きる」の用法に関しては、①切断・終結、②完遂、③極度の3つに分けている。

それ以外の先行研究としては、複合動詞「～こむ」を分類しているもの(黄2004、松本2009など)、「～きる」の意味について分類しているもの(杉村2008、新沼2010など)が多く見られた。

以上の先行研究を概観すると、複合動詞の後項を「強調」などとして扱うことに留まり、その意味派生については詳しく論述されていないと言える。なお、「～きる」、「～ぬく」、「～とおす」、「～果てる」などを「完遂」として扱う先行研究も見られたが、本稿で論じる「強調」とは違っているので、本論では言及しないこととする。

3. 研究方法と強調を表す複合動詞後項の位置づけ

本稿は姫野(1999)の複合動詞のリストをもとに、国立国語研究所によって開発された中納言(BCCWJ)、「複合動詞レキシコン」から複合動詞「～こむ」と「～きる」の用例を収集し、その中から強調を表すものだけを抽出して、研究対象とする。ただし、「勢いこむ」、「意気こむ」など「こむ」の前に名詞が来る場合、「馬鹿にしきる」のような「きる」の前に動詞以外のものも一緒に入っている場合があるが、それらは全て研究の対象から除外する。

例文収集の方法は次の通りである:

- (3) BCCWJからの例文を優先的に収集する。例文における動作の主体、共起する成分ごとに集める。
- (4) 姫野(1999)のリストに挙がっている語でBCCWJからの例文が見られない場合は、複合動詞レキシコンとwww検索ツールwww.goo.ne.jpから検索し、補足する。

なお、複合動詞の分類について、影山(2013)では、「語彙的複合動詞を主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞に区分することを提案し、アスペクト複合動詞が、従来の語彙的複合動詞と統語的複合動詞の間をつなぐ位置にあるだけでなく、歴史的変化や多言語との対照においても重要な役割を果たすことを示唆している」と述べている。影山(2013)は語彙的複合動詞を以下のように新たに2分類している。

- (5) 主題関係複合動詞
 - 手段:V1することによって、V2。ex.突き落とす、切り倒す
 - 様態:V1しながらV2。ex.流れ着く、転げ落ちる
 - 原因:V1の結果、V2。ex.歩き疲れる、抜け落ちる
 - 並列:V1かつV2。ex.忌み嫌う、恋い慕う
- (6) アスペクト複合動詞
 - 補文関係:V1という行為/出来事を(が) V2。ex.聞き逃す、編み上がる
 - 副詞的:V2が副詞的にV1の意味を補強。ex.晴れ渡る (=すっかり晴れる)、使い果たす(=全部使う)

強調を表す複合動詞後項の位置づけについて、本稿は上に示した影山(2013)の分類に基づき、「アスペクト複合動詞」の「副詞的」とされているものの一種として扱う。

4. 強調を表す複合動詞後項「～こむ」「～きる」の前項動詞について

4-1. 前項動詞の種類

考察対象は姫野(1999)の「程度進行」を表す「～こむ」と「極度」を表す「～きる」である。具体的には以下の表1に示す(語数は必ずしも姫野(1999)のリストと一致するとは限らない。検索しても出ない語がいくつかあるためである)。

表1 姫野(1999)の分類

「～こむ」の前項動詞		
固着化 (18)	濃密化 (14)	累積化 (14)
眠る、寝る、黙る、塞ぐ しよげる、思う、考える 決める、覚える、話す、喋る 構える、気負う、惚れる 溺れる、困る、弱る、信じる	老いる、老ける、やつれる へばる、冷える、枯れる、咳く 急く、じれる、立てる、めかす しゃれる、化ける、騙す	歌う、泳ぐ、さらう、磨く 拭く、練る、読む、漬ける 履く、煮る、炊く、洗う 食べる、鍛える

「～きる」の前項動詞		
自然現象 (30)	生理的現象 (19)	感情や精神的働き (37)
枯れる、静まる、萎ぶ、乾く 腐る、沈む、熟す、売れる、育つ、伸びる、撓む、歪む、緩む 煮える、固まる、衰える、汚れる、明ける、清まる、冴える、浸る、冷める、抜ける、落ちる 暮れる、開く、消える、寂れる くすみ、すすける	疲れる、くたびれる 息せく、むくむ、やつれる、飢える、空く 酔う、青ざめる、かすれる、ただれる、凍える 冷える、火照る、うだる かじかむ、なおる、しわがれる、痩せる	困る、苦る、慌てる、いじける、荒む、だれる、だらける、溺れる、惚れる、ふざける、浮かれる、狂う、のぼせる、しょげる、怯える、白ける、奢る、甘える、興じる、慣れる、馴染む、恐れる、諦める、バカげる、忘れる、わかる、決まる、頼る、張る 弾む、なめる、信じる、塞ぐ 任せる、心得る、悟る、割る

本稿は複合動詞の後項に着目し、その中で前項の表す動作や変化を副詞的に修飾する働きを持っているものを分析対象として、前項動詞のどのような側面を修飾するのかについて分析するものである。考察対象となる複合動詞において、前項は複合動詞の意味の中心であり、後項動詞は修飾的な働きをしている補助成分となっている。そのため、前項動詞の細かい分類が非常に重要なので、動詞の分類については陳(2013)にならい、Vendler(1967)の動詞の4分類に従って「状態動詞」、「活動動詞」、「変化動詞」、「使役動詞」¹⁾の4つに分ける(もともとは状態動詞、活動動詞、達成動詞、到達動詞となっているが、達成動詞と到達動詞は混乱されやすいため、それぞれ変化動詞と使役動詞として示した)。また、その中の「変化動詞」の進展性・非進展性については、佐野(2006)などの先行研究に従って説明する。考察対象の前項動詞を分類し、その結果は以下の表2に示している。

表2 強調を表す複合動詞「～こむ」と「～きる」の前項動詞の種類

	活動 動詞	変化 動詞	使役 動詞	状態 動詞
両方とも結合できる前項動詞	2	13	0	0
「～こむ」しか結合できない前項動詞	30	13	7	0
「～きる」しか結合できない前項動詞	12	55	3	0

4-2. 「こむ」と「きる」両方とも結合できる前項動詞

強調を表す場合、後項動詞「きる」とも「こむ」とも結合できる前項動詞には、以下に示した13語がある。

塞ぐ、しょげる、枯れる、惚れる、信じる、(恋愛に)溺れる、困る、冷える、やつれる、騙す、(喜びに)浸る、(心の根が)腐る、弱る

そのうち、「騙す」と「信じる」は活動動詞²で、他は変化動詞である。また、変化動詞は、人の気持ちを表すものと物事の状態を表すものに分けられる。具体的に同じ前項動詞(塞ぐ、しょげる、信じる、惚れる、冷える)を持っている例文をいくつか抽出して、以下のように示す。

- (7) 病人は回復し、塞ぎこんでいた連中も、一挙に溜飲を下げた。(加藤仁『定年百景』)
- (7) ほんの数カ月の間に、思いもよらない出来事ばかりで沈んで塞ぎきっていました。(http://schwarz777.exblog.jp/m2013-04-01/)
- (8) 苦しい闘病生活の末、医者からは手術を告げられ、なんの心の準備もなかった張先生は、すっかりしょげこんでしまった。(鷹木敦『お笑い超大国中国的真実』)
- (8) すっかりしょげきってしまう患者さんを見ていると、気の毒になってくる。(五木寛之『凍河』)
- (9) 病気ではないのに、自分は病気だと信じこんで煩悶する。(小野繁『ドクター・ショッピング』)
- (9) お前はものすごくかわいい、普通の子と違うって言われて、そう信じきっていて…(伊藤比呂美『プチタンファン』)
- (10) 名前を変えさせ、発行スケジュールを無理矢理にくりあわせて、大急ぎで掲載したのは、彼がいかにその作品に惚れこんでいたかを物語っている。(野田昌宏『科学小説』神髓)
- (10) 男は女に惚れきっていたから、別れたくないし、自分のものにしておきたかった。(佐江衆一『被害者の刻印』)
- (11) 雪の中に立ちつくしていたので、からだの芯まで冷えこんだぞ。(安西篤子『義経の母』)
- (11) たしかに佐知の手は冷えきっている。(阿部牧郎『出合茶屋』)

これらに共通している前項動詞を持っている「～こむ」と「～きる」の例文を考察すると、複合動詞の後項「こむ」と「きる」は強調を表すという点で共通しており、意味的

にも近いと考えられる。例えば具体的な例文を見てみると、複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」は、いずれも人の体やものの温度が下がる、或いは関係が冷めるという意味を表すことがわかる。以下に示したものがその例である。

(12) 夫婦関係が冷え込んでしまった。(作例)

(12') 夫婦関係が冷え切ってしまった。(作例)

上の例文(12)と(12')を見てみると、主体は両者とも「夫婦関係」であり、同じ状況を指していると捉えられる。「夫婦関係がすっかり冷えてしまった」というように、後項動詞「こむ」と「きる」は程度の強さを表す副詞成分「すっかり」などに相当すると考えられる。しかし、異なった形態の後項動詞を持っている以上、何らかの異なるところがあると考えられる。次は用例の多い「冷えこむ」と「冷えきる」を取り上げて、分析していく。

4-3. 「冷えこむ」と「冷えきる」の特徴

紙幅に限りがあるため、複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」のみを抽出し、それぞれの用法を具体的な例文の中から考察する。田辺(1996:9)の「後項動詞の文法化は、複合動詞の動的述語から状態性への移行に反映していることが認められた」という記述を踏まえ、本稿は収集した例文を連体修飾か主述か、及び主体が具体的なものか抽象的なものかによって分類した。その結果は以下の表3にまとめて示す。

表3からわかるように、複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」いずれも連体修飾関係と主述関係の例文に使われていて、主体は具体的なものと抽象的なものの両方に見られる。「冷えこむ」の連体修飾関係を見ると、主体が具体的なものを表す例は見られなかった。連体修飾の例自体が少ないが、主体は抽象的なものに限られている。主述関係に使われる例は連体修飾関係に比べて圧倒的に多い。主述関係において、主体が具体的なもの場合は気温や人の身体に限られている。主述関係の抽象的なものの修飾は、主体が多様であり、経済、市場、就職、夫婦関係や両国関係などに使われていて、使用範囲が広い。

表3 複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」の例文における特徴

冷えこむ (64)		
連体修飾 関係	具体的な物	/
	抽象的な もの (8)	日中関係、消費マインド、東京市場、クリーニングや花業界 アジア外交、夫婦の愛情、夫婦仲、様子
主述 関係	具体的な もの (14)	夜半、今朝、今日、夕暮れ、夜の空気、寝具、高地、肩先 手足、背中、足腰、朝晩、場所、明け方
	抽象的 なもの (42)	実体経済、消費意欲、景気、消費、住宅業界、住宅の販売 企業マインド、消費者マインド、個人消費、海外旅行市場 世界貿易、中小企業の設備投資、日本経済、対西側関係 地方経済、株価、両者の関係、世界的な IT 需要、日朝関係 インターネット、世界の皮毛需要、自動車市場、市場心理投 資マインド、裸商売、携帯電話市場、イケメンドラマ市場 高額品やブランド品の市場、住宅建設、受注、町の林業、対 日感情、女子学生の就職不動産市場、リート市場、夫婦の関 係、日中関係、夫婦の仲、内需、政治、就職事情、家庭生活
冷えきる (58)		
連体修飾 関係	具体的な もの (25)	身体、弁当、オフィス、天気、足、冬場の車内、校舎、冷凍 食品、空気、朝、山頂、スベアリップ、指、夜明け、MacBook エンジン、卵巣と子宮、場所、館内、水、倉庫、頬、海、生徒 コカ・コーラ
	抽象的な もの (21)	与野党、日中関係、心、中国と北朝鮮の関係、夫婦仲、復讐消費、 世界、実体経済、現場力、内需刺激、集团的感情、結婚生活、テ ンション、政治、熟年カップル、宇宙、愛、人体機能、経絡、消 費ムード
主述 関係	具体的な もの (7)	手、身体、部屋、指先や足先、胃腸、ビール、現代の女性の子宮
	抽象的な もの (5)	日韓関係、人間関係、懐、市場、景気

それに対して、「冷えきる」の場合では、連体修飾関係の使用率が高く、主体は具体的なものと抽象的なもの両方とも多く見られる。具体的なものの場合では、主体は人の身体、気温、物事、場所など幅広く使われていて、この点から見ると、「冷えこむ」の

連体修飾関係に比べて範囲が広い。抽象的なものの場合では、「冷えこむ」より例が少ないが、同じように経済に関するものや国と国の関係、夫婦関係を表す場合が多い。主述関係の例は連体修飾関係より少なく、そのうち、具体的な主体の場合は、主に人の身体や物事の温度に用いられる。つまり、「冷えこむ」と「冷えきる」は抽象的なものを主体とする時に、同じ用法を持っている、すなわち、重なっている部分が多いが、「冷えこむ」の方が修飾する主体の範囲が広いと言える。また、具体的なものを表す場合には、「冷えきる」の方が修飾する主体の範囲が広いと指摘できる。

5. 複合動詞「～こむ」と「～きる」の前項動詞及び派生関係

5-1. 複合動詞「～こむ」の前項動詞及び派生関係

先行研究では、複合動詞「～こむ」の意味を「内部移動」と「程度進行」に2大別している。姫野(1999)が「内部移動」として扱うグループの複合動詞「～こむ」は、前項動詞が主に移動や様態を表し、後項は主体や対象物の移動を表すものである。「程度進行」は本稿の「強調」に相当する。表2に示したように、「～こむ」の前項動詞は活動動詞が一番多く、その次に多いのは変化動詞であることがわかった。変化動詞の場合、「主体変化動詞に変化は必須であるが、動詞によって変化の仕方も様々である」(佐野2006: 8)。佐野(2006)は変化動詞句を「+進展的变化」と「-進展的变化」に分け、さらに「+進展的变化」を「進展性に限界を持たない動詞句³」と「進展性に限界を持つ動詞句」に下位分類している。「進展性」という概念について、森山(1988)は、「過程を持つ動きであると同時に、その過程において変化が漸次的に進むという意味」としている。佐野(1998)は、「程度副詞と主体変化動詞との共起から見ると、程度副詞によって、共起する動詞(進展性に限界を持つか否か)、修飾の仕方が大きく異なる」と述べている。強調を表す複合動詞後項は前項を副詞的に修飾する働きをしていて、この場合の後項動詞は程度副詞と似ている機能を持っているため、前項動詞の進展性の有無は後項動詞の意味に影響をもたらすと考えられる。本稿は、佐野(1998)動作の「進展性」についての分析を踏まえて、以下のようなテストを設定し、進展性に限界を持つか否かを判断する。

(13)a. 「少しVした」と共起できるか否か

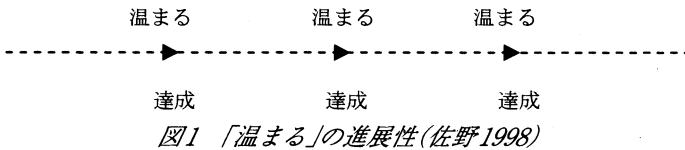
b. 主体が単数の場合、「次第にVしてくる/いく」と共起できるか否か

c. 「もっとVした」と共起できるか否か

例えば、「温まる」を例として説明して、次の例文を見よう。

- (14)a. 少し温まった。
 b. 次第に温まってくる(いく)。
 c. もっと温まる。

この3つのテストを用いて検証してみると、各例文において、「温まる」は主体の量ではなく、動作(変化)の量を表すことが判断できるため、変化動詞「温まる」は「進展性に限界を持たない動詞」であることがわかった。佐野(1998)では、「温まる」は「変化達成が漸次的に累加され、そのたびに程度の異なる結果状態が成立する」という原理的には無限に起こりうる変化であり、ほんのわずかでも温度が上昇すれば一定の変化が達成された」とことになると説明している。佐野(1998:9)の図を引用して、以下のように示すことができる。



強調の意味を表す場合、複合動詞「～こむ」の前項動詞には活動動詞が多いことが明らかになった。活動動詞「走る」を例として挙げて見ると、「走る」という動作そのものには限界点がなく、到着点を付加成分として付けられない限り、「走る」という動作は限界点を持たない。この場合、後項動詞「こむ」と結びつくことで、主体の活動が焦点化され、主体の意志性が強くなり、後項動詞「こむ」の意味も前項動詞の表す動作・行為の多回性・繰り返しなどに変わる。前項が変化動詞の場合、変化が進んでいき、後項動詞は抽象的な状態変化の強調として捉えられる。これらのことを踏まえると、「こむ」と結合する変化動詞はすべて進展性に限界を持たない動詞であり、「こむ」と結合しても、複合動詞の表す状態の変化は限界点を持たないと考えられる。

複合動詞「～こむ」の意味と意味の間の関連性について、筆者は他の論文で分析してきた。注意したいのは、複合動詞の後項「～こむ」の基本義(内部移動)は本動詞「こむ」の意味とは全く違うことである。しかし、今回の考察結果を見ると、強調を表す場合、「～こむ」の後項は本動詞「こむ」と何らかの関連性があると言える。本動詞「こむ」は、「道がこんでいる」、「手のこんだ仕事」といった用法を持って物事の静態の状態を表しており、それ自体の意味(「ある場所いっぱいに人や物が入り合う、また、用事などが一度に重なりあう」)にも「程度の強調」という要素が含まれているために、強調を表す複合動詞後項の意味と関連性があるのだと考えられる。ただし、本動詞の場合

は、人や用事などが多量という意味であり、複合動詞の場合は、前項動詞の表す動作や変化が多量であるという意味として捉えられる。また、筆者の考察結果によると、「～こむ」と共起するものには状態や時間を表す副詞(ex.「何度も・十分に鍛えこむ」、「しっかりと洗いこむ」、「どンドン練りこむ」、「勝手に信じこむ」、「何時間も喋りこむ」など)が多く見られる。このことから、「～こむ」においては動作・変化の過程に焦点が当てられており、その結果は重要視されていないと言える。つまり、複合動詞の意味は本動詞の意味の一部であるということである。以上のことを踏まえると、「～こむ」の意味派生は以下のようにまとめられる。

「こむ」⇒〈変化動詞〉ある場所いっぱいの人や物が入り合う。用事などが一度に重なり合う

移動を表す活動動詞+こむ⇒内部への移動(V1は移動、V2は方向を表す)

活動動詞+こむ ⇒動作・行為(強さ・深さ・繰り返しなど)の強調(V2「こむ」の意味が希薄化し、その意味の一部「いっぱい・重なり合う」のみ残っている。V1の動作・行為を副詞的に修飾する)

変化動詞+こむ ⇒変化過程の強調(V2「こむ」の意味が希薄化し、V1の変化を強調する)

5-2. 複合動詞「～きる」の前項動詞及び派生関係

姫野(1999)は複合動詞「～きる」を「切断・終結」、「完遂」、「極度」に3つに分けている。本論文はそれに従い、「切断」と「終結」を別々に扱い、4つに分類する。それぞれの用例数は以下の表4のように示す(語数は必ずしも姫野(1999)のリストと一致するとは限らない)。

表4 複合動詞「～きる」の意味ごとの用例数

切断	終結	完遂	極度
12	4	116	106

上の表4からわかるように、複合動詞「～きる」において、「完遂」と「極度」は主な意味として用いられている。ここで意味ごとに前項動詞の特徴をしてみる。

「切断」の意味は本動詞「切る」と同じで、前項は手段を表す。この場合、前項動詞によって対象物が切断されるという結果に焦点が当てられる。「終結」の意味は「切る」

という動作の途中でやめるという意味から派生し、前項動詞の行為・動作をやめる(終結する)という意味になる。「完遂」の場合は、前項動詞の表す動作が終わるという意味である。「終結」と「完遂」両方とも動作のアスペクト的側面に焦点を当てており、動作の途中段階や最後の終了段階に位置づけられる。「極度」の意味は本稿のいう強調の用法に属し、前項動詞は状態変化を表す場合、動作ではなく、主体の状態が最後の終了段階に位置され、主体の状態変化の結果が焦点になる。「強調」を表す場合、前項動詞はすべて進展性に限界点を持っていないものである。要するに、複合動詞「～きる」は動作の時間軸におけるある段階を表し、動作・変化の結果に焦点を当てていると言える。また、考察の結果によって、例文においては複合動詞「～きる」と共起する副詞的成分が少なく、「完全に」というもののみ見られることがわかった。その意味派生は以下のようにまとめられる。

「きる」⇒〈活動動詞〉つながっているもの、続いているものなどを断つ。

活動動詞+きる⇒物理的切断(V1は手段、V2は切断)

活動動詞+きる⇒時間的切断(V1は希薄化し、V2の意味も少し希薄になり、中止を表す)

活動動詞+きる⇒動作の完遂(V2は希薄化し、V1の動作は最後まで完了する)

変化動詞+きる⇒変化結果の強調(V2の希薄化、V1の変化結果が限界まで達成する)

5-3. 複合動詞「～こむ」と「～きる」の比較

変化動詞と結合する場合、2つの複合動詞の前項にはいずれも進展性に限界を持たないものが入り、また、両者の意味が重なっているところがあると考えられる。両者において異なる点としては、「～こむ」は変化の限界点に達成しないのに対して、「～きる」は変化の限界点に達成するということが挙げられる。前項動詞は複合動詞の意味の中心であり、前項動詞の性質によって、後項動詞の意味が変わる。つまり、後項が前項のどの側面を修飾するかは前項動詞の性質によって決まると言える。具体的に言うと、「～こむ」の「強調」の意味は本動詞「こむ」の中に含まれており、「～きる」の「強調」の意味は動作のある時間軸における段階を表すと考えられる。BCCWJを検索して見ると、本動詞の「こむ」には、「街道が前よりもっとこんでいる」という例文があるが、これは進展性に限界点を持っていない動詞である。複合動詞の後項が強調を表す時、前項動詞の表す動作・変化は進展性に限界点を持たないが、動作・変化の進展に

従い、進展性に限界点を持っている強調を表す「～きる」と意味的に重なる場合があると考えられる。また、「～こむ」の意味は動作・変化の過程を強調し、「～きる」の意味は動作・変化の結果を強調するという違いが見られる。同じ前項を持っている「冷えこむ」と「冷えきる」の連体修飾関係を見ると、「冷えきる」の連体修飾関係の用例が多い。このことから、「冷えこむ」より文法化が進んでいることがわかった。

6. まとめと今後の課題

本稿は複合動詞「～こむ」と「～きる」の強調を表すものを対象とし、中でも用例が多く、同じ前項動詞を持っている「冷えこむ」と「冷えきる」に重点を置いて、それぞれの特徴を考察してきた。考察結果として、具体的な天気やものの温度を表す場合と抽象的な両国関係や夫婦関係などの場合では両方とも使えることがわかった。具体的なものを主体とする場合には、「冷えきる」の範囲が広い。それに対して、抽象的なものを主体とする場合には、「冷えこむ」の範囲が広い。また、強調の意味を前提として「～こむ」と「～きる」の前項動詞を分析すると、それぞれ活動動詞と状態変化動詞が結合されやすいことがわかった。複合動詞「～こむ」と「～きる」の意味派生については、強調を表す場合の複合動詞は前項動詞が意味の中心であり、後項の意味は前項動詞の性質によって決まるということ論述した。派生関係から見ると、強調を表す場合、「～こむ」は本動詞の意味の一部のみが残って、動作・変化の過程に焦点が当てられる。それに対して、「～きる」は動作の時間軸における段階を表し、動作・変化の結果に焦点が当てられることがわかった。変化動詞と結びつく場合には、「～こむ」と「～きる」の意味が重なっているところがある。また、「～こむ」と「～きる」にそれぞれ違う性質の前項動詞が来るのはこの焦点からの影響を受けているためであると考えられる。

筆者が考察した強調を表す複合動詞の範囲に入れられるものは他にも多数あるが、それぞれの特徴や使い分けなど、先行研究ではまだ十分に論述されていないところがあると考えられる。今後考察対象を増やして研究していきたい。また、語彙的アスペクト複合動詞(～出す、本稿の言う強調を表す「～こむ」、「～きる」)と統語的アスペクト複合動詞(～始める、～終わる)とはどう違うかについてもまだ明らかにされていないところがある。それについても今後の課題としたい。

注

1. 状態動詞: 時間を超越した静的事象を表す。活動動詞: 継続可能な動的事象を表す。変化動詞: 何らかの終了点を有する動的事象を表す。使役動詞: 何らかの活動を通して、対象物のある場所・状態に変化させることを意味する(陳2013:20—23)。
2. 「信じる」、「考える」、「騙す」などの動詞を「心理動詞」として扱っている先行研究があるが、本稿では三原(2000)に従い、これらの心理動詞を「活動動詞」として扱う。
3. 進展性に限界を持たない動詞句とは、いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持たないものである。例えば、「(湯が)温まる」は進展性に限界を持たないもので、「(湯が)沸く」は進展性に限界を持っているものとしている(佐野2006:8)。

参考文献

- 陳 劫憚(2013)『現代日本語の複合動詞の研究』東北大学大学院研究科言語科学専攻博士論文
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 景山弘幸(1996)「有界性と比喩的拡張」『札幌大学女子短期大学部紀要』28, pp. 45—56札幌大学女子短期大学部
- 影山太郎編(2013)『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』
- 北原博雄(2000)「限界性というアスペクチュアルな性質—動詞句についての意味論と統語論—」『日本語学』19, pp. 72—75
- 黄 其正(2004)『現代日本語の接尾辞研究』溪水社
- 松本 曜(2009)「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』pp. 175—194 くろしお出版
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, pp. 54—75 国立国語研究所
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 南場尚子(1991)「複合動詞後項の位置づけ」『同志社国文学』34, pp. 72—94
- 『日本国語大辞典』第二版(2001)小学館
- 新沼史和(2010)「複合動詞「一切る」に関する統語論的分析」『高知学園短期大学紀要』40, pp. 23—32
- 斎藤倫明(1992)『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味』ひつじ書房
- 佐野由紀子(1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3, pp. 7—22
- 佐野由紀子(2006)「動きに関わる量について—量的程度副詞と動詞との共起関係から—」『高知大國文』39, pp. 79—88
- 杉村 泰(2008)「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7.
- 武部良明(1953)「複合動詞における補助動詞の要素について」『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』三省堂
- 田辺和子(1995)「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」『日本女子大学紀要・文学部』45, pp. 1—16
- Vendler, Zeno(1967) *Linguistics and Philosophy*. Cornell University Press